ここらで三六九！

ウラノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ここらで三六九！

【Ｎコード】
Ｎ８６９０Ｃ

【作者名】
ウラノス

【あらすじ】
山の奥からやって来たのは、呪いで小さくなった爽やか天然サムライの三六九君！ヤンキー系年下純情少女と暗殺系同級生不思議少女に挟まれて、暮らし始めるは無明道場！変人奇人に囲まれながら、家事に修行に恋愛に・・・。今日も明日も四苦八苦？いいえ無敵のラブコメライフ！！

プロローグ：今日から三六九！

ここは長野の山の中。
そのまた奥のさらに奥。地図にも載らないその村の少々古びた道場で、今日も彼は修行する。

・・・［もとの姿］にもどるため。

「無量我一流　第壱式　　一の太刀！」
『薙！』
ズバババババァ！！
目にも止まらない早業で、刀（真剣）を振り抜く、いわゆる昔の侍のような服装をした一人の男・・・（の子？）が、幽霊でも出てきそうな古びた道場にいた。
その男（の子？）、名前を【一条路三六九（イチジョウジミロク）】といい、歳は十八になる。・・・のだが、外見が［ある理由］で、小学生くらいの大きさになってしまっている。
「ふぅ。ようやくもとの姿と同じくらいのキレになってきたか。」
ちなみにここまで技にキレが出てくるようになるのに約５ヶ月間、来る日も来る日も血のにじむような努力をしてきたのは、彼の（小さな）手にいっぱい広がっている破れ続けたマメを見ればわかるだろう。
普通なら失神するほどの痛みがあるはずなのだが、ちいさなころから修行が全てだった彼にとっては、逆に心地よいくらいだった。
《ガラガラガラガラ！》

いかにも古そうな音をたてるいかにも古そうな戸を急いで開けて、あわただしく入ってきたのはイカツイ顔して大柄の、和服を着たオッサンだった。

「やったよ♪我がかわいい三六九タンよ！」

・・・キモッ！

「叔父上、その話し方はなんとかなりませぬか？なんと言うか、その・・・」　いいんだよ、三六九君。　素直に言っても。

「もぉー☆！なに？三六九タン、照れちゃった？」

オエェェェッ！そ、その体で？その髭で？［☆］はないだろう？［☆］は？

「そ、それが最近良く聞く［萌え］というやつなのですか？」

いや、激しく違うよ？ってか古いだろ？

「うむ。なんだか大変だから、もとに戻すぞ」

肯定すんなよ・・・

「して叔父上、某（ソレガシ）に何か用があったのでは？」

やっと戻ってきたよ・・　「おお、そうだった！」　って忘れてたんかい！

「実はな・・・」

「実は？」

「お主をもとに戻す方法が見つかったのだ！」

「・・・そ、それは・・・誠にございますか！？」　「うむ。ワシが嘘をついたことが、今まであったか？」

「それは、たくさん。」　おいおいおい！

「そ、そうだったか？し、しかし今回は誠だ！」

胡散臭いな・・・

「まぁいいんですよ。・・・して、その方法とは？」

「ズバリ、東京だ！」

「と、東京ぉー！？」

「そう、あの東京だ」

東京ってそんなすごいかな？ってか［あの］ってなんだよ？

「三六九よ、お主はただいまより、山をおり、東京に行くのだ！そうすれば（たぶん）もとに戻れる！（と、思う）」

いや、今回もだめだろうな・・・

「は！某、ただいまより、東京にいってきまする！そして、もとに戻ってみせまする！」

・・・だめだろうなんだろーなーきっと。

「う、うむ」・・・こうして、真面目な天然、爽やかサムライ男（の子）の、

一条路　三六九、十八歳（外見小学生）は生まれて初めて山をおりることになったのだが・・・大丈夫かなぁ？

プロローグ：今日から三六九！（後書き）

えー、今回のナレーターは作者でしたー☆

第一撃：出会って三六九！

ここは東京、［あの］東京。
そこの一角、廃墟の工場、中で喧嘩があってる模様。
《ビシィィィッ！》
「グハァッ」
《バシィィィッ！》
「ゲヘェッ」
《ドシィィィッ！》
「ゴハァッ」
金髪を翻しながら、どんどん相手を殴り飛ばす影一つ。
最初は六人対一人で始まった喧嘩も、今では残り一人になっていた。
「ちくしょうっ！なんでこいつはこんなに強ぇんだよぉー！」
震えながら、しかし恐怖より屈辱感がまさったのか、残った一人は金髪に殴りかかった。が・・・
「遅ぇぇ！こんのっ雑魚がぁっ！」
《グゥワシィィッ》
一際デカイ音を立てて、最後の一人は綺麗に吹っ飛び、
「グッ、これが・・・喧嘩屋鬼夜叉かっっ・・・」
この一言を残して大地に沈んだ。
「失礼な雑魚だな、俺は女だぞ？」
けっ！と、いいのこし、金髪［美少女］は去っていった。
・・・このときは、まさかあんな事が起こるとは、誰も思うわけはないよねぇ？
☆★☆★☆★☆★☆★☆★
こ、ここが東京かぁ！

某（ソレガシ）こと一条路三六九にございまする。
某は今、東京にいます。そう、［あの］東京にございまする。
ただいま、地図を頼りに【無明道場】を探しておりまする。
地図が読めるのは村でも某だけなのだ！エッヘン！
山のような［びる］とやらがたくさんあり、それ以上に人、人、人・・・
「こんなにたくさんの人は初めてだ・・・」
それにしても山をおりてからずっと皆が某を盗み見ておる・・・。
《チラッ》
《チラチラッ》
「やはり見られておる！」　某の顔に何かついておるのか？がしかし、鏡（出るときに、叔父上に渡されたのだ！早速役に立っておりまするぞ！礼は後で必ずいたしまする！）で、三回ほど確認したが、何もついてはおらぬかったぞ？
ん？　まてよ・・・
「はっ！ま、まさかっ！」　よもやこれは、某を試しておるのやもしれぬぞ？
いや、絶対にそうだっ！そうに違いあるまい！
おのれ！侮りがたし東京！
「どうやら、気合いを入れ直さねばならぬようだな！」
・・・・・・・・・・
にしても人が多い！それに木や草花がまったくないぞ？いくらなんでも四月のこの時期に・・・おかしすぎる！
うぅ・・・某、少し気分がわるきなってきたようだ・・・
だが休もうにも、場所がないのだ！
「うぅぅ、ぐるぐるするぞぉ」
むっ？なぜ地面が近づい・・・て・・・？
グゥゥ、意識が・・・む、無念・・・だ

「と・・・とーきょー、お、恐るべし」

・・・パタッ

☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「ったく！スカートが汚れちまったよ・・・」

豪奢な金髪を振りまきながら、華麗に歩く少女は、短いスカートをチェックしながら舌打ちをした。

しかしこの女の子、名前を【無明道（ムミョウドウ）　麗（レイ）】というんだが・・・外見を一言で言うと、［色っぽくてかわいい］がピッタリだろう。

肌は肌理が細かく、真っ白。少し切れ長で勝ち気な感じの、しかし奇跡のように整った目鼻立ち。

唇はきれいに朱を差し、ぷくっと肉感がある。（キスしてぇ！）

身長は１６０後半はあるだろうか？

女の子にしては大きめだろう。

髪は金髪。実は先天的なものなので、とてつもなく美しい色合い、手触りをしているサラサラヘアーだ。　今日はストレートの気分だろうか？

プロポーションはハナマル３つあげちゃう！！グレイトバディ！グッドウエスト！ナイスヒップ！ベリーベリーマーベラスボディ！！

おおっと！なんか暴走しちまった！と、とにかくそれくらいすごいのだ！

でも・・・まぁその分性格がすごいのだ！

過去に何かあったせいか、特定の人間以外とは、自分から仲良くなろうとはしない。

まぁ他人とは［それなり］には会話はするのだが、口がとにかく悪く、彼女に罵られたせいで、精神的病に冒された人は、一人や二人じゃないそうだ。

それだけではない。

彼女の最大にして絶対の要チェックポイント、それは・・・喧嘩が恐ろしく強いのだ！

彼女の二つ名、【喧嘩屋鬼夜叉】は、その美貌と相まって都市伝説化しているほどだ。

まぁ料理が異常にヘタ（人には猛毒らしい。危険！）だったり、思い込みの激しい所があったり、変なとこで正義漢な所があったりするのだが・・・。

って長くなっちった！

「あーあースゲー強えー奴だって聞いたから、アタシはてっきり・・・」

てっきり・・・って？おじちゃん気になるなぁー　「まぁ、そぉ簡単にいくわきゃねーっつの！アホらしいーってなんだ？あの子？変な格好してんな」

視線の先には・・・って三六九さん！何ふらふらしてるんですか？って袴姿に刀をさして、それに加えてポニーテールっすか？そんな格好で東京に来たんですか？

「って、あいつ倒れちまうんじゃねーねか？」

麗さんの予想が的中！って三六九さーーん！

「おいおいおい！大丈夫かよ？」

急いで駆け寄り麗さんが抱き上げる！いいなぁ

「おい！袴着てっから坊主・・・だよな？綺麗な顔だなーって！こらっ大丈夫か？」

《ユサユサッユサユサッ》　麗さん揺らしすぎだって

「むーっ、と、とーきょー」

三六九さんが顔をしかめる。うん、たしかに怖いよね、東京。

「はぁ？って、大丈夫そうだな」

ゆるまった三六九さんの手から地図がコロリ。

「ん？なんでこいつ、うちの地図もってんだ？」

かわいらしく麗さんの膝の上で寝返り（寝てんのかい！って羨ましい！）を打つ三六九さん。って！うちの地図？なにそれー

「・・・スゥスゥ・・・どーじょー・・・いかなきゃ」

か、かわいい！言ってなかったけど、外見は超美少年なんだよなぁ三六九さん！十八歳だけど。ちなみに麗さんは十七歳。

「まぁ袴着てっからなー」

ん？麗さん、抱き上げたままどこへ行かれるんですか？

「うちの地図持って袴姿、寝言で道場とくれば、まぁうちの関係者だろ？」

あぁーおうちに送ってあげるのか！まぁなんだかんだで面倒見はいいからなぁ麗さんは。

「軽いな、こいつ」

ん？なんかおかしくない？どうして［あの］麗さんが初対面の人にこんなに親切なんだ？

罵倒して精神的病にすることはあっても、抱き上げて介抱なんて絶対しないお方だぞ？

だってほら

「何見てんだコラッ？」

って言っちゃってるし、三六九さん抱き上げたままで。

なんかありそうな予感がするなぁ！オタクに言わせればフラグが立ってますよ？これは。

そーこーしているうちに【無明道場】に到着！

三六九さん！よかったねぇー。

にしても、立派な道場だこと！長野の山奥とは大違いダネ！いろんな意味で。

「ついたぞー起きろよ！」《ユサユサッユサユサッ》

「まだいける、とーきょー、」

何の夢？

「起ーきーろ！」

《グワンッグワンッ》

「うぅぅ叔父さんデットぉー」
物騒だなぁおい！
「ちっ！スゥゥゥ・・・」　おおっと？来るか？必殺の一撃っ！
「おぉーーっ！きぃーぃ・・・って、何やってんだアタシ？こんなガキのために？」
今気付いたんかい！
（なんでなんだ？どうしてなんだ？・・・ん？なんつーか・・・これは・・・）
「み、三六九さん・・・！？」
え！？なんで三六九さんのこと知ってんの！？
「って！んなわきゃねぇーってな！あの人はたしか、アタシの一つ上のはずだし、それにこんなとこに来るわきゃねーし」
・・・なんか、訳ありみたいだなぁ麗さん。
「むむむぅ・・・ん？」　おっと？起きましたか！三六九さん！
「おっ！起きたか。大丈夫かよ？」
やっぱ、やさしいんだよなぁ麗さん。
でも外見小学生でも、こんだけやさしいのはおかしいってばねぇ？
「おまえ、名前は？んで、どーしてうちの地図もってんだ？」
完全に覚醒した三六九さん。やっと状況を把握した模様。
《ガバァッ》
「なっ！ここはどこだぁ！お、おぬしっ！何奴！」
まぁ、そぉなるはなぁ？
「なんだぁ？失礼なガキだなぁ！道端でいきなりおまえが倒れるもんだから、［この］俺が【無明道場】まで連れて来てやったんだよ！ったく！感謝しやがれ！」
そうだぞ！三六九さん！感謝なさい感謝を！
「さ、さようにございまするか！いや、先の失礼、御免なれ！この通りでございまする！」
いきなり土下座って・・・。ま、まぁ素直なのは三六九さんの最大の美的ですからなぁー。

「い、いいって!そこまでしなくてもっ!・・・そ、それより、さっきの質問に答えろ!」

（なんだよ!ア、アタシ何赤くなってんだ?）　まぁ、素直に接されたことに、照れちゃったんでしょ?

こー見えても、麗さん照れ屋さんだし♪

「某、名を一条路三六九と申しまするっ!齢は十八。ここに来たのは、しばらくの間、ここにおいてもらうためにございまする!」

み、三六九さん!あーた外見小学生ですよ?

「は?いまなんつった?」　そりゃ疑うわな?

「この身をここに・・・」

「そっちじゃねぇ!名前のほうだ!」

ん?なぜそっち?

「一条路三六九にございまするが・・・?」

［麗さん考え中・・・］

（いくらなんでも三六九さまって・・・。んなわけねぇってのは、さっき確認したしなぁ?んじゃなんで三六九さまの名を名乗るんだ?しかもこんな子供が・・・。ん?まてよっ!わかったぞ!この子供、もしかして・・・）

［麗さん閃きました］

「おまえ、［あの］山から来たんだろ?」

［あの］山とは長野の山奥です。一応念のため。

「左様にございまするが・・・?」

（やっぱりな!だから初めて会った気がしないんだなあ）

「アッハッハッハッハ!なるほどねっ!手紙が来てるよ!［しばらくあずかってくれませんか］ってな!」　手紙とは・・・やっぱ叔父さんかね?

「それにしても、別にそんな嘘をつかなくても大丈夫だぞ?ちゃんとうちにはおいてやるぞっ!あそこの人には世話になってるしな!」

あー、どおりで三六九さんを知ってるわけだな・・・。まぁ当の

三六九さんはキョトンとしてるけどね。
「あぁすまない！アタシは無明道麗、十七だ！よろしくな。それで？坊主の名前は？」
「はっ！え、えっと一条路三・・・」
「本当の名前だ！」
んー？困ったねぇ？
「三、三六九にございまする！」
そーなんだから、しょうがない。
「ったく！あそこの人は揃って頑固だなぁー。まぁ、後で手紙で聞くかな？」
って今気づいたんだけど手紙行くんだね。山奥！
「・・・伝書鳩まだいるかな？」
なるほど、無限大だな鳩パワーっ！
ん？三六九さん、なんだか怒って・・・
「嘘ではありませぬ！」
まぁ、嘘が一番嫌いな人だしな三六九さんは・・・。
「わーったから、とりあえず部屋にいくぞー」
やっぱり麗さんだなぁー♪相手のことを微塵も考えてない手の引き方だぁ！
「ちょ、まって欲しいで・・・ってわわわっ！」
「な、うわぁ」
《ドテェェッ》
三六九さん、麗さんを巻き込んで転んじゃいました。まあ転けるわな。
《ムニッ》
なんと、三六九さん！手が麗さんの胸に！ですよっ！
「キャッ！」
バッ！と三六九さん、手を引きます。紳士だね！
ってか悲鳴かわいい。
「す、すまぬ！麗殿！」

（やわらかくて、大きい！初めてにありまする！）
すぐあやまる！これ、基本。
でもまぁ・・・
「て、てんめぇぇぇぇ！」
こうなるわけで・・・
「ご、誤解にございまするっ！事故でありまする！」　でもまぁこうして・・・
「許すか！この、変態小僧！！！」
二人は出会ったわけだし
「ギ、ギャァァァァァッ！！」
まぁ、始まり、始まり？《チュドォォォォン》
《ドカッバキッズドッ》

・・・始まんのかな？

第一撃：出会って三六九！（後書き）

ここらで紹介！　【一条路三六九】ここだけの話、実はこの物語りに出てくる人物名は、1～9までの数字で作られてます。紹介ですが・・・まぁ真面目で頑固で爽やかな天然の、ポニーテールの袴着超美少年です。　小さくなった理由は・・・また今度。　ちなみに無敵の設定です。（麗さんと○○さんを除いてですが・・・）

第二撃：壊して三六九！

・・・三六九と麗が出会うころ、麗にやられたヤンキー達は、廃墟のホテルにいると言う、とある男に依頼する。
麗に復讐してくれと・・・。

「そ、それじゃ・・・やってくれるんすか？」

包帯ぐるぐる巻いた男が、きっちり六人、揃って聞き返す。

「あぁ。この、三六九さまに任せておけ。そのかわり・・・報酬の金と、この麗って女は俺が頂くからなぁ？」

・・・暗い影からいかにも図体のでかそうな声が聞こえる。

「はいっ！それはもちろんです！では、早速・・・」

包帯男達は、互いに手に手を取って喜びまくる。

「あの［不動明王］の三六九さんにやってもらえるなんてっ！いくらあの［鬼夜叉］でもぜってー勝てねぇよ！なぁ？リーダー！」

へぇー！三六九さんって有名人だったんだ！ってか、［不動明王］はないでしょーよ？

「あぁ！二年前のあの伝説、［千人切り］の三六九さまだからな！この目で見れるだけでもゴキゲンだぜ！」

・・・三六九さん、二年前になにやってたの？・・・それに二つ名多いな？なに？［千人切り］？

ってかただ今、三六九さんは無明道場で麗さんにボコボコにされてんだから、こんなボロい廃墟のホテルにいるわけないんだけどなぁ？

ってことは・・・この三六九さんは、偽物っすか？ど、どんだけー♪

「そぉだろぉ？ガッハッハッハッハ！」

（ったく、こんなの倒すだけで、金と女両方手に入るなんてな！しかもこんな超極上玉楽めったにいねぇ！だから偽者語んのは、やめられねぇってな！）

・・・偽物三六九、黒いなー。

そんなこんなで偽三六九が、麗さんと喧嘩を開始することが正式に決定いたしました。

ところで当の三六九さんはというと・・・？

～無明道場～

「うぅ・・・誤解にございまするよぉ・・・・・」

吊るされてました。

「うるせぇ！ア、アタシの胸触っといて、誤解で済むか！このエロガキっ！

（は、初めて触られた男がガキって・・・ウワァァァァァン！！）

あらら・・・純情っていうより潔癖？？いや、古風？

「だ、だったらどうすればいいんでございまするか？」

必死です。三六九、必死です！

「知るか！こ、この変態小僧！」

≪ゲシッゲシッ≫

け、蹴っちゃったよ！麗さん！

「そ、そんなに蹴ったら綱が・・・」

おいおいおいおい！綱切れそうじゃん！

「しるかしるかしるか！このっこのっ！」

≪ブチッ≫

あ、綱切れた

「うわぁぁぁぁぁっ」

「なっ！キャァァアア」

≪ドッシーーーン≫

「むーっ！大丈夫でございまするか？麗殿？」

（む？なんだ？この白いのは？）

「・・・・・・？」

み、三六九さん！それ、麗さんのパンツ・・・・。

って！三六九さんが麗さんの上に乗っかって、顔が股の間に・・・・。

エ、エロイ。まっこしエロイ・・・・

≪プルプルプルプルプル≫

「ん？麗殿、なぜ震えておられるのですか？ま、まさかどこか打ったのですか？」

何も言わない。おっちゃんは逃げます。ごめん三六九さん・・・・・。

「イイィィィィヤァァァァァァァァッ」

ムクッと起き上がり、ひとしきり悲鳴を上げた後・・・・。

「こ、殺すコロスころすコーーーローーーースーーーー」

襲い掛かる麗さん！目がね・・・目がヤバイんすよ？

［ちなみに遠くからこっそり解説中］

「麗殿、なんだか知らぬがすまぬ！す、すまなかったでござる！しかし、事故にございまするよ？」

そうだ！謝れ！謝るんだ！・・・無駄だけどな。

「カンケーナイアル。コロスアル」

泣く子も黙る［鬼夜叉］麗さんが・・・ひそかなファンクラブ（会員三ケタを軽く突破）まである麗さんが・・・・・。

壊れちゃったよぉ～～～！

「や、やめてくだされ！そ、そんなので殴ったら某死んでしまいまする！」

「ケラケラケラケラ」

「や、やめてーーーーーー」

≪ドッカーーーン（効果音多すぎなんで）≫

・・・・この日、東京は一時的に、震度5強を観測した。麗さん、やりすぎ。

そんなこんなで、動き出すとーきょーでございましたとさ♪

第二撃：壊して三六九！（後書き）

今回は少し短くてすみません！
次は必ず、読みやすく、長い文を！

第三撃：暴れて三六九！（前書き）

楽しんで読んで頂ければ・・・・
もっと漢字べんきょうするぞぉ！

第三撃：暴れて三六九！

・・・ここは廃墟のホテル内。偽の三六九が大演説。陰の中からね。

「・・・明日、仕掛けるぞ」

包帯まいた男たちは、揃ってうなずく。

どうやら明日、仕掛けるらしい。ってかもぉ深夜だから今日なんすけど・・・それよりどこに？

「無明道場だ・・・って誰だっ？」

いや、ナレーターですが？えぇ～声聞こえるんだ・・・なんかうれしい♪

「・・・？空耳かぁ？」

おいおい！期待させといて、残念・・・。

「まぁいい。いくぞ！この、【不動明王】三六九さまについて来い！」

かっこよく勢い付けて叫んだはいいものの・・・偽者なんでね。

「おおっ！」

ん～包帯男軍団もかっこつけたいんだろうけど・・・つかないよ

なぁ。

☆★☆★☆★

≪ガラガラガラ≫

戸の開く音

「離婚したんだ、三年まえに。」

ヒヤァッ！れ、麗さんかぁ・・・。びっくりしたぁ！

「れ、麗殿・・・それは・・・その、すまん」

「べつにいいよ。まぁ母さんはアメリカでバリバリ稼いでるし、父さんは武者修行の旅だし」

「なっ！女子を一人置いて？」

もっともだな。三六九！

「んなわけねーだろ？ルームメイト？じゃねぇ、間借りって言うーのか？がいんだよ！今は里帰りしてっけどな！」

へぇ～っ！そいつは初耳！

「む？そんなのがいるんでございまするか？。」

「まぁ、な。ってか腹減ったんだろ？」

ん？麗さんご機嫌がもどってる？

「れ、麗殿！さっきは・・・」

「あぁ、いいって！じ、事故だったんだろ？ならさっさと忘れろ！それより、悪かった。

一晩も閉じこめといて」

そう思うんなら、なぜあんな折檻を？？たしか○●○●で三六九さんを何発も・・・・

「いや、某はなぜこのように繋がれておるのでございまするか？某、昨日の昼からの記憶が・・・」

おぉっと！やっぱりあんだけ殴られたらねぇ？記憶も吹っ飛ぶわなぁ。

「おいおい！マジかよ？」

まぁ切れて加減なかったしなぁ。

（まぁ覚えてねーならいっか。）

「ん～なんとなくでございまするが、白いものと柔らかいものがッッッグボファ！！！」

「思い出すんじゃねぇ！！」

あらあら麗さん、まぁ～だ殴るんですくわぁ？（ぶらり途中下車の旅風）

「なんだかなぁーって！なにやらせんだよ！」

≪ゲシッガシッ≫

「そ、某何も知らぬぞぉぉぉ・・・・・・」

立て！立つんだ三六九ぅ～～～！

「かってにしてろ！」

（・・・まぁでも、もう昼飯のじかんだしな。しょうがねぇ、いっちょ作るか！）

ちなみに、麗さんの作ったご飯を食べたことがある人にとっては、「毒盛るか！」と同義です。

あしからず。

・・・なんとゆーか、麗さんも壮絶な料理の腕だったが、三六九さんも相当な味音痴だった。

が、二時間後、見事に腹を壊すのは・・・当然っちゃぁ当然。しかし三六九さん、東京の空気に

慣れてないせいかなぁーっと、適当に考えます。晩飯も食べるのか・・・。

でも、これに麗さんが気をよくしたのもつかの間。三六九さんが本気で偶然に風呂場に居合わせ

てしまい・・・。まぁ裸は見られなかったんだけどさ・・・またやっちゃったわけで・・・。

≪ドッカーーーン（やっぱり効果音多すぎ♪）≫

結果、鎖にまたつながれてしまいましたとさ♪しかーーっし！麗さんは、初めて自分の料理を完食してくれたことに感動し、結局晩御飯もつくっちゃってます。ここらへんが純情

なんだなぁ～。

そんな、幸せそうな日曜日の夕暮れのなか、迫り来る黒い影！そう、ついに偽三六九の登場です！

「む？なんだか変な気が近づいてくるぞ？」

あ、起きたんすね！三六九さん！

（これは・・・、間違いない！某か麗殿がねらいである！）

「麗殿！危険にございまする！鎖を解いてくだされ！麗殿！麗殿！・・・・・」

麗さん、鼻歌まじりに鍋をくるくる。

「・・・やっぱ味噌汁だよなぁ～」

あちゃー聞こえないみたいです。・・・えぇっ！それ味噌汁？緑色してるよ？ドロっとしてるよ？

って！そんなことしてるうちに・・・

「おい！無明道麗の家はここか？」

「へい！たしかにここであってます！」

きちゃいました・・・偽者が。

「いいか、ソッコーに決めるぞ？」

≪ドンッドンッドガッシャーーーーーーン≫

ドアを壊して、ついに進入～～～！破片が三六九（本物）さんにヒ～～～ット！！気絶ゥゥゥ～！

「な、なんだ？道場か？ったく！あのバカガキが！」

だめだ！麗さん行っちゃだめー！

「俺の名前は三六九！【不動明王】の三六九さまよぉ！」

偽者が嘘つきながら道場前に侵入！

≪ガラガラガラガラ≫

「おい！無明道麗！てめぇを倒しに来たもんだ・・・・ってあれ？」

そこにいたのは・・・・鎖で巻かれた美少年。一応本物の三六九さん。気絶中。

「なんだぁ？何でガキがいんだ？しかも鎖って・・・」

≪ダッダッダッダ！ガラガラガラガラ！≫

「おい！エロガキィ！・・・って、なんだぁ？てめーら！」

麗さん登場～～～～～！

「おうおうおうおう！【鬼夜叉】！てめぇに復讐しに来たぜぇ」

包帯軍団の一人がしゃしゃり出る。

「このまえはよくもやってくれたなぁ？」

キョトンとした顔の麗さん。今まで相当の数を殴ってきたので、いつのことだかさっぱり。

「へっ！ビビッて声も出ねぇってか？」

いや、違うぞ包帯軍団！

「おまえら誰だ？」

まぁそぉなるわな！

「な！

「このおかたの名前、聞いておどろくな？あの、【不動明王】の三六九様だぞぉ？」

・・・嘘つきになるんだろうか？この場合・・・。被害者？

「ったく次から次へと・・・。こんの偽もんがぁ～！！」

ビクッとなる偽三六九さん。ヤバイねぇ～

「な、何言ってやがる！俺は！て、天下の三六九さまよぉ！」

あくまでも、言い張るんですね・・・。

「うるせぇ！本物の三六九さんはもっと細くて小さい。髪も長ぇ。それに・・・」

それに？

「三六九さまはこんなちんけなチンピラの真似事は絶対にしねぇ！」

おぉ！三六九さん、そんなに信頼された人なんだ！・・・今気絶して鎖に巻かれて後ろに転がってる

けどさぁ～。

って、さま付けなんだよな。麗さん。あやしいのぉ～♪

「うるせぇ！この刀を見ても、まだ俺様を偽者と言えるかぁ？ぁあ？」

そう言って偽三六九が出したのは・・・一本のきちゃない木刀だった。

「そ・・・それは・・・【越天楽】！？なぜそれをお前が！！！」

なにぃ！【越天楽】と言えば、【大地賛唱】などと共に大宝剣のひとつであり、通称

【音光雅越】、【虚空瞬天】と呼ばれている【速(スピード)】を追求した木刀のことで

ある！！わかんない人にはわかんない！分かる人少ない！

「この刀は三六九の所有物だったはずだ・・・ろ？」

あぁ～なるほどね♪なになに？偽者はこのタイミング待ってました！みたいな顔してんね？

あいかわらず遠まわしに言うと不細工の部類のど真ん中の顔だけど。なんか毒舌♪

「わかったか？あぁん？このおかたは三六九さまに間違いはねぇんだよ！」

包帯がすごむ。でもお前がすごいんじゃないぞ♪このスネ●♪

「・・・それでも、アタシは信じない。アンタは三六九さまじゃない」

「なら・・・この俺がぶっ殺す！それで証明してやんよ！」

おぉ！ついにメンチを切った！ゴングならしまーっす！いいっすか？カーーーーァァァッッン

≪ズダダッ！≫

勝負は一瞬！煌く金髪がハジケル！つっこんでいく偽者！木刀【越天楽】ふりかぶり、

そして交錯する！！

≪バキィィィィィッッッ≫

「そ、そんな・・・ほ、ほん・・・・・」

吹っ飛ばされる人影！息を呑む包帯軍団・・・！

勝者はただニヤリと笑うのみ・・・。

「俺の勝ちだ！」

どっち？

第三撃：暴れて三六九！（後書き）

漢検受けます。準二級です。正直無理だって・・・・・

第四撃：二人で三六九！（前書き）

えータイトルの形式を、かんがえたあげく・・・一番安直なシリーズものにしました。

また変わっちゃうかもです。すみません・・・。

第四撃：二人で三六九！

勝負は一瞬だった。

「ぐはぁっ！」

倒れたのは・・・偽者だった。

「三六九さーーん！」

包帯軍団の一人が信じられないと言った感じで叫ぶ。　まぁーそりゃ焦るわな。

「だからそいつは三六九さまじゃねぇ！だいたい、宝刀持ってんのに、力を使えないなんて偽者以外ありえねぇだろーが！」

失神する偽者を中心に固まる包帯軍団。

「それより・・・まさかこのアタシに復讐なんてしといてタダで済むなんて思ってねよなぁ？」

バキバキッと拳をならす麗さん。気が立っています。怒っております！

「アタシ今機嫌が悪いからねぇ？」

一歩、また一歩と【鬼夜叉】が近づいて行く。

「一撃で決めてやんよ」

拳を振りかぶる【鬼夜叉】こと麗さん！包帯軍団が本気で死を覚悟したその時！

《ゴウンッゴウンッ》

《ゴッゴッゴッゴッ》

道場内いっぱいにこだまするバイクのエンジン音。

外に出てみると、約三、四十人の見るからに【やられた】感のある不良達が、道場の周りを囲んでいた。

「はん！ひょんな（こんな）ひょともあろうひゃと、呼んどいたんだよ！てめぇにやられたやつらをな！」

振り返ると、顔を腫らした偽者が、笑って立っていた。

「へっ！さすがにこんだけ人数がいたら、いくらてめぇでも勝てねぇよ！」

さっきまで絶望していた包帯軍団が一斉にいきがる。

「はん！んなもんでこのアタシがビビルとでも思ってんのかぁ？あぁ？」

と、麗さん、口では強がるものの・・・

（獲物持った奴がほとんどか・・・。さすがにヤバイかもしんねぇな！くそっ）

いくら麗さんでも、これだけの人数を相手にするのは、不可能だろう。じりじりっと不良達が、迫ってくる。顔にはニヤッと生理的に嫌な笑顔を浮かべて・・・

追い詰められる麗さん・・・。絶体絶命のピンチ！チキショォッ！

「う、うーん・・・。騒がしいなぁ？」

三六九さん！い、今ごろ起きたんすか！！

ウ～ンッと背伸び。そんな起き抜けの三六九さんの目に飛び込んできたのは・・・

追い詰められる麗さんに、にじりよる大勢の男たち。

さっきまでの喧嘩を見ていない三六九さんは、か弱い可憐な麗さんに襲い掛かる鬼畜ども・・・という公式が頭に思い浮かぶ。ってかあんだけ麗さんに殺られといて、か弱いって・・・あ、記憶なくなっちゃってんだねぇ～。かわいそぉなんだけど。

一気に激怒する三六九さん。なりふり構わず叫ぶ。

「おまえたちっ！たった一人のか弱き女性にこんな人数・・・恥を知らぬのか！恥を！」

いきなり叫ぶ鎖に巻かれた美少年に、その場にいた全員が目をむける。

「あぁ？なんだぁてめぇは！殺されてぇかこのガキがぁ！」

「まずはてめぇからやっちまうぞこらぁ！」

「余計なこと言ってんじゃねぇ！黙ってろ！」

口々に飛びかう罵詈雑言の嵐、一部し・ん・ぱ・いしている麗さん。偽者がのっそり近づき、持ち上げる。

「あんだぁ？坊主？鎖なんかにまかれてよぉ？殺してやろうかぁ？」

仲間が来て態度のでかくなった偽物。本物にむかって脅しを掛ける。

「その汚い手を放せ。」

本物は静かに言う。

「放せだぁ？笑わせんなよ？くそガキがぁ！」

顔は笑っているが目がマジな偽物。

「やめろっそかいつは関係ないだろ！まだガキなんだ！放してやってくれっ！」

焦って叫ぶ麗さん。それを見て残酷に笑う偽物。

「ならぁ・・・こいつは、俺がじきじきにやってやるよ・・・」

そう言って三六九さんを地面に叩きつける偽物。三六九はなんともない様子。

「やめろっ！この腐れやろうが！そいつだけは巻き込むな・・・お

願いだから・・・」

泣き目で叫ぶ麗さん。それを見た偽物は命じる。

「はぁっはっはっはぁ！てめぇら！やっちまっていいぜぇ！その女ぁ、足腰立たなくなるまで痛み付けてやんなぁっ！俺はこいつをかわいがってやんよぉ」

待ってましたとばかりに飛び掛かる不良達。狂喜に満ちた瞳で麗さんに殴りかかる！

最初はなんとか殴り倒していたが、体力が限界にきて腕が上がらなくなる！その隙をついて迫る不良達！

もうダメだっ！と麗さんが目を瞑り、絶望したそのとき！

≪バキッ！バキッ！バキッ！ブチィッ！！ジャラララッ≫

「おまえたちが救いようのない奴だと言うことがよくわかった。」

鎖の千切れた音と、有無を言わさぬ凛とした声。反応した包帯の男達が三六九にむかう！

≪ドォォッ！≫

「ガハァァッ」

包帯男Ａの鳩尾を蹴り飛ばし、ぶつけてよろけた包帯男Ｂの頭に飛び回し蹴り！白目をむき倒れる包帯男Ａ＆Ｂ。ビビッた目をして後ずさる残り４人。

疾風のごとく包帯男Cの懐にもぐりこみ、顎を拳で砕く。そのまま肘鉄でなぎ倒し、後ろから殴りかかる包帯男Dの腕を払いのけ、がらあきのボディに拳を叩き込み、腰を折って下がった顔に膝を打ち込む。そのままの勢いで包帯男Eの顔面を殴り飛ばし、鼻をへし折り吹っ飛ぶ包帯男Eの顔面を一気につかみ床にたたきつける。残り一人。

発狂してバットで殴りかかる包帯男リーダーを流れるようにかわし、後ろにまわりこみ首に手刀を入る。一番あっけないよ・・・リーダーっ！

それをまばたきする間にやってのけた三六九さんは、唖然とする不良軍団にむかって静かに言い放つ。

「某が・・・おまえたちを成敗してくれようっ！」

そう言って、ギラリッ。って消えたぁっ！？

・・・それは一瞬だった。

偽物を殴り飛ばし、木刀【越天楽】を握ったと思ったら、一薙ぎで五，六人を斬り倒していき、まるで舞うかのごとく、縦横無尽に動き木刀を操った。気が付いたら偽物以外全員気絶していた。

木刀をもった三六九さんはさらに強かった。まさに最強！格が違いすぎだ。まるでネズミとライオンの勝負。

目を見開いて驚く麗さん。信じられない、と。そう、全てが信じられなかった。

口をあんぐり開けた偽物はたまらなくなって叫ぶ。

「いったい・・・お前は何物・・・・・」

まぁそう思うのも無理はないなぁーっと、口をひらき一言。

「何者と言われましても・・・ただの三六九にございまするよ。」

麗さん、今なら信じれます。だってあの強さは・・・どう考えても

「み、三六九さま・・・」

振り向きにっこり笑顔で、うれしくてしょうがない様子で、

「やっと呼んでくれたでございまするな！れぇーくん♪」

いたずらっ子みたいに笑うあの笑い方。それは彼女が小さいころから大好きだった、笑い方。そして【れぇーくん】とは…小さいこ

ろの呼び名だった。

（あぁ！やっぱりそうだ！この呼び方をするのは二人だけ・・・）

「み、三六九さまなんだね・・・」

そういえば、初めて会ったあの時、大きななにかを感じたのは、小さいころの三六九さまにとても似ていたからだろう。

ってかまんまだしな。まぁいきなりだったから、無意識のうちにその感じを否定しちゃったんだね♪

・・・まぁでも「あ、会いたかったです。ずっと、ずぅっと・・・」なんて言えるほど、麗さんは素直な性格じゃなかった。

口から出たのは、

「おせぇんだよ！このばかっ！もっとはやく目さませよぉ！」

なーんて言う、正反対の言葉だった。ん？あんたのせいっしょ？自業自得っしょ？ってか敬語は名前だけなのね・・・

「いや、またまた某、記憶が曖昧で・・・目が覚めたらこの状況で・・・って！忘れておった！」

今の今まで忘れられていた偽物さん。って、自分自身でも忘れてたんだ・・・。

「あぶねぇ！自分で自分忘れるとこだったよ・・・」

やっぱり！ってそんな偽物に殺気全開の三六九さんが問います。

「おぬし、何奴だ？なぜこのようなことをした？」

・・・間違ってももう私は三六九だ！ガッハッハッハッハなんて鬼より強い本物には言えません。　苦しみに苦しんだあげく・・・

「に、任務だ！」

「うそつけ！」

《ドッカーン（お決まりになってきました♪）》

吹っ飛ぶ偽者。比喩じゃないよぉ～ほんとだよぉ～

ま、これが後に大変なことになるんです（偽者にとっては生死をわけるくらい）が、・・・。誰もわかんないよねぇ？

《ペタンッ》

よろっとなって、そのままズズズッと女の子座りになった麗さん。惚けた顔になってますよ？

「ど、どうしたのでございまするか？け、怪我でもしたのなら・・・」

かけよる三六九さん。顔を覗きこみます。

「み、三六九さまぁふぇぇぇぇぇぇぇん」

安心して気がゆるんだんでしょう・・・素が出ててきちゃってます。号泣！

一方、いきなり泣かれた三六九さん。とにかくおろおろ。

「だ、大丈夫！某は三六九にございまする・・・！！」

と、言ってはみたものの、何分女の子を相手にした経験が、皆無に等しい三六九さん。とにかくてんやわんや。言ってること意味不明。

ひとしきり泣いた麗さんが、恥ずかしさのあまりまた三六九さんを●●○●で殴り気絶させて、そのまま警察を呼び後処理がおわったのは、夜も深まる深夜のことだった。

三六九さんが目覚めると、ベットですやすやねむる麗さんの腕の中だったのは、、、鼻血を拭いて気絶したため、夢と片付けられた。

そんなこんなで、二人は出会い、時が動き出し、まだまだ、さまざまな出来事が待ち受けているのだが・・・とりあえず今日はおやすみと言うことで・・・・。

「あれが三六君・・・小さくなったのは本当だったのか」

暗い夜の闇にまぎれる影ひとつ。

「あなたの命は私が・・・」

穏やかには・・・いかないみたいだね。

第五撃：メイトで三六九！『上』（前書き）

おくれました。ほんっとすいません・・・。

またちょくちょく更新はじめますので、感想や評価など、おまちしております。

遅れてもうしわけありませんでした！

第五撃：メイトで三六九！『上』

暁に空が染まり、青からオレンジへと染まる朝露と澄み切った空気。

朝。それは一日の始まり・・・。

そんな爽やかさをぶち壊す寝ぼけ顔で廊下を歩く麗さんフラリ。

今はＡＭ７：００。今は学校があってないので早起きする必要は皆無（学校があっても遅刻の女王の麗さんはまだ寝てる時間なんす）なのだが・・・

≪ブンッブンッブンッ≫

道場の方向から聞こえてくる『あの』音に目が覚めてしまったのだ。

この音の原因は・・・そう。一週間前から道場に居候しにきた三六九（様）のせいだ。

「ったく・・・」

自分は朝に弱いことは、もう関わる人間ほとんどが知っている。

・・・それと眠るのが何よりも（三●九さんは除く・・・とか言っちゃったり？）好きなこともね・・・

「・・・くしゅんっ」

まぁ、春と言ってもまだ三月。冷えた空気が身にしみます。あぁ・・・布団もどろっかなぁ・・・。

でもここまで来たしな・・・と、道場への扉に手をかけます。・・・・・・。

≪ガラガラガラ≫

「おや?麗殿!おはようでございまする!今日は早起きでございまするなぁ～♪」

にっこり爽やか笑顔の三六九さん。キラリと光る汗によく合う真っ白の道義に紺の袴。昨日まとめて洗濯したもんね

今では機械ドドド音痴の麗さんよりも洗濯機の扱いが遥かにうまいのだ・・・あぁ!麗さん?じょ、冗談ですよ?マジデ!いや、マジデ!まさか二枚に一枚色落ちさせたりシワだらけにしたりなんて一言もいってないっすよ?

・・・っていうか、三六九必殺爽やか笑顔にノックダウン寸前だったんすか。よかった～!あ、でも顔真っ赤ですよ?なんて言うの?

バレバレ？

「うぅ～～」

「？？　なにをうなっておられるのでございまするか？」

「なんでもないやい！≪ぷいっ≫」

？？を頭に浮かべる三六九さん。そんな顔もかわいいわけで・・・

「と、とにかくっ！今日はあいつらが帰ってくるから！そのつもりでいろよ！」

今日、４月１日・・・ついに、麗さんのルームメイトが帰ってくる日だったりするのです！（ドドーン）

「わかっておりまする！きょうは某のとっておきでお出迎えするでございまするよ！」

（・・・まさか紋付羽織袴とかじゃないだろうな・・・考えすぎか！）

それはそうとして・・・てなわけですが。

入るために一歩踏み出す・・・が

「～～～～～！！」

あぁ、床冷たかったのね・・・。

「・・・ところで今日はいつもより早起きでございまするな～。なにかあったのでございまするか？」

・・・まさか「今日こそ朝ごはんを簡単なパンで済ませず、純和食に仕上げてみせる！」だなんて言える筈もなく・・・

「そ、そのだな・・・なんつーか・・・そう！か、掛け布団に裏切られたんだ！」

・・・キョトンな発言・・・アザーッス！そんな顔真っ赤っ赤にしなくてもいいのにぃ～おいちゃん萌えるわぁ～って！もう古いか・・・。

「う、裏切られたのでございまするか・・・」

「う、裏切られたんだ・・・。」

・・・・・。

「あ、某、朝ごはんご用意しまするね。パンで良うございまするか？」

ここでキラーン。この時のために、一昨日から情報を集めてきたのだ！・・・って、麗さんご飯も三六九さんにやってもらってたんすか・・・？

「しょうがないだろ？ワタシが焼いたパン食べたら、三六九（様）ったら腹壊しちまったんだから・・・。ワタシはなんともねぇってのによ？」

・・・とりあえず、自分基準で物事考えるのやめてみようか?

「うっせぇ!」

「・・・麗殿?誰と話しておられるのでございまするか?」

あぁ。ただの危ない人だよね。

「なんでもない!と、とりあえず飯はワタシが作る!三六九は呑気に茶でもすすっとけばいいんだ!」

「なんと!麗殿が朝食を!!??そんな!い、居候してる身でありながら麗殿の御手を煩わせる真似など某にはできぬでございまするよ?だから飯はそ、某が・・・」

泣きそうな瞳で訴える三六九さん。

「そんなに深く考えなくても・・・。まっかせとけ!」

かくして、麗さんクッキング★が始まったわけだが・・・。

緑のお味噌汁の進化系、青いお味噌汁にカーボン魚。ご飯もほんのりピンク色のご飯をたべた三六九さんがお腹を壊したのは、言うまでもないことだ・・・・。

ってかなんでそんなにカラフルになんだよっ！

～～それから二時間後～～

「もう止まったか？」

ふらりふらりと歩く三六九さん。顔がゲッソリなのは・・・合掌。

「な、なんとか・・・。」

と言うより、ナチュラルに食中毒用の薬やら腸炎の薬やらが置いてあるこの道場に、三六九さんは少し恐怖したのだった・・・・。

「っと！もうすぐ帰ってくる時間だ・・・。」

ルームメイトが帰ってくるのは正午１２時ごろ。

「ならば某、準備をせねば！」

「ちょいとまった！」

と、走り出そうとする三六九さんを呼び止める麗さん。

「なんでございまするか？」

「あぁ、その・・・山で変な女に体小さくされた・・・ってやっぱり言うのか？あいつらにも・・・」

そうなのです！麗さんは居候二日目に体の小さくなった訳を聞いちゃっていたのです！

「うむ。やはりともに暮らす者としてもそれは礼儀だろうし、なによりも麗殿のるーむめいと、というのであるのならば、信用に値する者であるはず！」

「いや、そういうわけじゃなくて。信じてもらえないだろうし。頭変な小学生だとしか思われないだろうし。」

麗さんも、初めてそれを聞いたときは、信じられなかったものだし（縛り上げて●○○●で殴った気が・・・）ね。

「それでも、でございまするよ。隠し事は某の性に合わないでございまする」

「・・・・」

かっこつける場面・・・かなぁ？

≪ガラガラガラガラガラガラガラ≫

「たっだいま～～～～ん」

「ただいま、ですわ」

つづく！

第五撃：メイトで三六九！『上』（後書き）

え～新キャラが現れます！

またどんどん来るのかな?考え中です・・・。

名前を考えたり、キャラクターを考えるのは、とても楽しいことです。

でもけっこう大変ですね。

あぁ・・・

第六撃：メイトで三六九！『下』（前書き）

評価・感想お待ちしています！

・・・新キャラ出すって結構ドキドキしますね？
これって作者だけなんですかね？

第六撃：メイトで三六九！『下』

おっきな玄関ドドンと開けて、入って来たのは百花繚乱花も恥じらう乙女が二人。

「ただいま、ですわ」
「たっだいま～～～ん」

「おぅお帰り！早かったな？」

玄関ドアを勢いよく開けて入って来たのは、清純そうなイメージの和服黒髪美女といかにも元気そうなゴスロリ金髪美少女だった。

「あらぁ？、なんだか綺麗ね。一週間も家を空けていましたのに・・・。麗、家事ができるようになったの？もっと汚れちゃってるかと思いました。」

黒髪美人はおっとり呟き、首を傾げて不思議がる。

「やよねぇ正直に言っちゃいなよ！麗ねぇならゴミ屋敷にしかねないかもってさ～」

元気娘はなんというか・・・期待通りのキャラクター。

っていうかかわええのぉ！おいちゃんもぅここがこんなんでよぉ？

「るせぇぞ小奈美！ったく・・・さっさと上がれよ」

三人並んで仲良くリビングへ。まぁ女三人集まれば姦しいとは言い

ますが、よくもまぁこんなに話題が尽きないものです。

・・・・・・・・・・

麗さん達の住む街の名は、架空都市【那由多町】。

関東の南東部に位置し、東京湾入口にあたる。

温泉で有名な観光名所・・・だったのだが、１０年前から始まった【森羅万象グループ】の買い取りやら乗っ取りやらで旅館は次々消えて行き、終いには小さいながらも日本経済の一端を担うほどの一大経済都市にまで発展していく。

比較的温かい気候に青い海、そこに広がる異国情緒あふれる主要商業都市として全世界にその名を馳せている結構スンゴい（らしい）街だ。

那由多駅から南に延びる商店街、通称【阿頼耶坂（あらやざか）】がいまだに活気あるのも魅力の一つで、娯楽施設も多数あり中高校生はまず遊びに困らない。

だが駅の北側は【森羅街（しんらがい）】と呼ばれるほど森羅万象グループの関係ビルで埋め尽くされており、【百本木ヒルズ】やら【茂手尾参道ヒルズ】やらが立ち並ぶセレブシティー化している。

人口は約４５万人だが、昼には他県から働きに来たり通学に来たりする関係で一気に倍以上に膨れ上がる。

そんな【那由多町】の少しはずれにあるなかなか趣きある旧旅館、【温泉宿弥明後日（やのあさって）】を麗さん家族は１０年前にいち早く買い取り改造。さらに道場まで建てて暮らし始める。

そもそも麗さんのパパさんは有名な武術家で数多くの弟子を受け入れており、その弟子達を住まわせるために部屋の多い旧旅館が必要だったわけだ。

まぁ仕事命のママさん追ってアメリカに行っちゃうほどの愛妻家なんだが・・・。

そんなこんなで弟子達は全員一人立ち。旧旅館である【弥明後日】はたくさんの空き部屋を残し売りに出されるはずだったのだが、そこで麗さんが待ったをかける。

「待った！」

麗さんにとってはかなりたくさんの思い出の詰まった家である。売りに出されるなんて認められないって話であるし、そんなことするくらいなら私が残って管理でも何でもするとも言いだした。

それを聞いた子煩悩パパさんは当然大反対するのだが・・・裸一巻成り上がり女社長のママさんはあっさり認めてしまう。

曰く、

「いい女ってのは度胸と根性。それ磨きたいなら一から自分んでや

ってみろ」

というのがママさんの信条らしい。

この家に『ママさんに逆らう』ことは最高刑より重いらしく、死刑じゃ済まないというのがもっぱらの噂だ。

・・・麗さんは母親似なんだね。

そんなこんなで一人暮らしを始めるわけですがね。

何といっても家が広いんです！

まず一階はリビング（旧ロビー）、ダイニング（旧調理場）、キッチン（旧調理場）に加えて４部屋、二階に大部屋含む５部屋の計９部屋。

また源泉が家のすぐ真下にあるため、年中蛇口ひねれば温泉の出る温泉好きにはたまらない（ママさん温泉大好き）場所でもあり、家には今でも露天風呂が完備。大浴場は管理の問題から無くなったが、代りに備え付けられた檜のお風呂も大人５人が楽に入れるくらいの大きさ。

イタセリーツクセリーである。

難点と言えばそこそこ長い階段を上るか、道場前に繋がる坂（前に暴走族使用）を上るかしなくては行けない場所のあることだが。

ちなみに麗さんは二階東部屋一号室で、美女姉妹はその隣の二階東大部屋。ほかにもいるんですがね。ケッケッケ

～終わり～

「・・・なんとなく為になったようななならなかったような気がするんだが？」

「あ、あたしも～」

「奇遇ですね、私もです」

あたまに？を浮かべながらコーヒーをすする三人娘。

「まぁそれでだ。お前らにひとつ重要なお知らせがあってな？」

少し真剣な顔の麗さんに、二人は顔を見合わせる。

「それっていいお知らせ？悪いお知らせ？」

頭をチョコンと傾げてたずねる妹さん

「いいお知らせだと思うぞ。たぶん」

「あらあら。大方また私らの仲間が増えた・・・って所じゃないかしら？」

鋭い！思わず言っちゃうそのと～り！（小●清風）

「おぉ！よくわかったな！」

「うふふふっこの家の状態に、キ・チ・ン・と使われた形跡のあるお台所を見れば大体分りますよ？」

麗さん・・・いったい普段どんなキッチンの使い方してんすか。

「やった～～～またお友達が増えるんだね～♪いったいどんな人？男？女？あたしより年上？」

「えぇ～っとだな、それは・・・」

≪ガタンッ≫

んっと一斉にドアのほうをむく三人。

≪テンテケテケテン♪テン♪テケテケテケテン♪≫

どこかから聞こえてくる琴の音色。

ヤベッという顔になる麗さん。これはもしかしたらもしかする・・・

あの紋付き袴姿？

「これはこれはお初にお目にかかりまする。某、名を三六九と言いま・・・「きゃぁーーーかわいい！」いや・・・その・・・「まぁまぁまぁまぁ！かわいらしいっ≪キュピーーン≫」あぁ・・・」

いっせいに抱きつく姉妹。あの・・・その紋付き袴姿につっこみは入らないんですか・・・？

（ううっ！正装の三六九様もか、かわいい・・・）

あぁ、入らないのね。

「あのっそのっ貴女様たちのお名前をっ」

自己紹介まだなんて・・・すっかり忘れてたテヘッ

「私、二階東大部屋住人の【二之宮（にのみや）　小奈美（こなみ）】１６歳！金髪入っちゃってるけど純日本人だよ♪よろしくね！」

まずは元気いっぱいのゴスロリお嬢のじょうから。あぁいかにもな自己紹介・・・。

「同じく二階東大部屋住人【二之宮　弥生（やよい）】１８歳。小奈美ちゃんの姉ですわ。以後よろしくお願いいたしますわね。」

黒髪美人はしっとりやさしく。ぼ、僕のお姉ちゃんになってくださいっ！

・・・あ、あの？麗さん？なんだか殺気が・・・いたいっ痛いっす！

まぁ鈍感ボーイが【恋の殺気】に気づくわけでもなく・・・。

「某、名を【一条路　三六九】と申しまする。齢１８にございまする。よろしくお願いいたしまする」

「はぁ？１８歳？・・・あはははははっ！おもしろいね！三六九君は！」

「あらあら？見かけによりませんのね？同い年なんですの？」

「いや、やよねぇおかしいでしょ！どう考えても小学生でしょっ！」

「ふふふっ冗談ですわよ」

まぁ信じられる話ではないっすよね。普通は

「・・・それが、マジなんだ」

シリアス顔でつぶやく麗さん。

「やだなぁ～レイレイ！きついよ？その冗談」

「マジなんだよ。マジで三六九は１８歳なんだ」

そう言ってうなずく麗さんと三六九さん。うんうん。

「あらあ・・・「えええええええええええええええええええええっ!?」ら?そうなの?」

「まぁいろいろあったもので・・・。正真正銘18でございますする」

そんなこんなで一時間、小奈美ちゃんに絶叫されたり弥生さんに抱っこやらされちゃった三六九さんは・・・

デレデレして麗さんに・・・

「デ、デレデレしてんじゃねぇ!」

「そ、某なにも・・・≪ゴスッ≫グフッ」

●●●○で殴られて気絶しましたとさチャンチャン♪

・・・いいなぁ・・・ハッ！べ、別にうらやましくなんかないんだからね≪プイッ≫

第六撃：メイトで三六九！『下』（後書き）

名前のほうは、
小奈美＝５７３
弥生＝８４１
となっています。名前考えるのが厄介なんですよ！
もう作者ネタづまりで・・・
なにか名前のグッドアイディア募集します！３つの数字で名前を作る・・・。
結構難しいんすよね。

最後に、読んでくださってありがとうございました！

第七撃：忍者と三六九！『上』（前書き）

えー忍者様登場の回です。

それではどうぞ！

第七撃：忍者と三六九！『上』

・・・街が眠り、人が沈む。

闇も深まる深夜三時。

満開の大桜のてっぺんで、一人の忍が見つめる先は旅館の陰を色濃残す無明道場。

顔を被う忍び装束から覗く、冷たく鋭い眼光は虎かはたまた狼か。

「・・・何奴」

覆面からボソッと呟き、白い吐息を吐き出しながら、すっと目を細める。

その忍、名を【三間院　黒夜】。

忍・ボディーガードの名家【三間院】の後継者にして伊賀と甲賀を極めた史上最高の忍である・・・のだが、まぁ詳しい事情はまた後ほど。

そんな黒夜がさっきから殺気を投げつけるのは、自分の知らぬ間に

増えている小さな新しい住人だった。

まぁわかる。あんな小さい子どもがいることはたしかにおかしい。

ここは殆んどが家出（まぁまだ黒夜を含めて三人しかいないのだが）をしたもの達の居候場所なのだ。

たぶんあの小さな居候も家出かなにかをしたのだろう。

だが黒夜は、三六九さんから感じる威圧感・・・圧倒的な、まるで強大な嵐のような気配を全身に感じていた。

どう考えてもおかしい。

（忍術を総動員して気配を断たなければ、この距離でも自分の存在に気付かれてしまうだろう。）

それに少し前にあの【壊し屋】の気配をこの近くで掴んだ。

【壊し屋】と言えば、裏の世界で名の轟かす幻の暗殺者。たしか今は森羅万象グループに飼われているはずだ。

忍の最強の武器は忍術でも刀でもない。情報と判断力なのだ。

「あの童は恐らく油断を誘う仮の姿（勘違い）か。大方森羅万象がお嬢様を消すためによこした刺客であろう（早とちり）。・・・お嬢様の周りに常に仕掛けてある罠を全て欺くとは（麗さん全破壊）相当の猛者（大正解）だな」

（お嬢様に害を与える者は、誰であろうと消すのみ。）

「仕掛ける」

気配を少しずつ滲ませていく。

まだ三六九さんは眠ったままだ。

（まぁまだ小鳥ですらも気づかない程度の気配なのだが・・・。）

闇にまぎれて一気に接近する。普通なら気配に気づいた時にはもう敵の懐に忍び寄っている。

この時も変わらない。

一気に高く跳び、空中からクナイを三六九さん目がけて投げる、投げる投げる投げる。

速度が速すぎて軌道が見えねぇ！！

「・・・忍法音殺クナイ一式」

技名あんのね

・・・空飛ぶクナイはそれぞれ別の軌道を描きながら三六九さんにむかっていく。

≪ザッッザッザッザッザザザザッザ≫

両手両足に計一〇個のクナイが突き刺さる。

「これで終い・・・疲れるな。」

フッと白吐息を一つ。

以外にも黒夜は不殺を信条とする忍だ。

昔とある人物から泣きながら命令されたのがことの始まりなのだが・・・それもまた後で。

気だるげな顔をしながら悠長な足取りで近くの大木に下りる。

さてどうするか・・・黒夜はそんな顔をしながら（余裕な顔でとも言える）一気に窓の中へ飛び込もうとしたそのとき、（黒夜の）歴史が動いた。

≪ガサッ≫

「こんな夜更けに・・・某になんの用でございまするか？」

ばっと黒夜が振り向いたそこには、先ほど十個のクナイを手足に突き刺したはずの暫定暗殺者が明らかに寝起きです風な顔をして立っていた。

それも細い木の枝の上にだ。

「！」

めっちゃ焦る黒夜さん。

「いや、そっちが驚かれても困りまするのだが・・・」

ザ★ごもっとも

「我がクナイをかわすとは・・・。だが引くわけにはいかない。尋常に勝負願おうか」

いきなり来ましたね。ぅおいっ！

「よかろうっ！忍びと相対するのは久方ぶり！楽しませてもらいまするぞ！」

外見子供ＶＳ忍者

その勝負は、人知れず屋根の上で展開される。

唸る木刀【越天楽】に、圧倒される黒夜。

「やるな・・・だが！負ける訳にはいかない」

≪ブブブブブブッン≫

三人、四人と増えていく黒夜。

「・・・忍法【分身の術】」

「あまぁぁぁぁぁぁっい！」

ズバババッと風に溶かし、剣撃を放って行く。

「やはり・・・たかが分身じゃ効かないか」

「あたりまえにございまする！さぁもう後はないでするぞ？」

すっと木刀を下げ、間合いを詰めようとする三六九

「今！秘儀【影・分身】！！」

再び分身が現れる。だが先ほどと違うのはその分身も動いていること。

「ほぉ！影分身までできるとは・・・これはちょっと本気を出さざるを得ない状況でございまするな！」

一人ひとりを相手にしながら、独特のステップを踏み始める三六九。

「「「「甘いな。そんなステップじゃかわせない・・・」」」」

「その考えが甘いのでございまするよ！隙だらけでございまする！」

だんだんとステップを速めていく。

かわす・・・というよりは、その逆にわざとあたりに行っているような、そんな動きをする三六九さん。

「初登場はプロローグ。無量我一流　第壱式　一の太刀！」

「【薙・旋】！」

ズバババッと、さっきの何倍もの轟音を立てて、刀を振りぬく。

その刀の軌道は三人の黒夜を一気に、文字通り【薙いで】いた。

「グゥッ・・・ハッ」

ぎりぎりかわしたにもかかわらず、黒夜はその剣撃だけで弾き飛ばされてしまった。

「だ・・・っが、まだまだだ！忍必殺舞闘組極（しのびひっさつぶとうくみきょく）【虚空連断】！！」

すぅっと姿を消す黒夜。

「雲隠れ・・・でございまするか?」

だがそこからは何も帰ってこない。

「なめられたものでございまするな・・・そこっ!」

ブワッと木刀を突き出すとそこには腹を突かれた黒夜が。・・・だが

「なめているのはどっちかな?」

その影が消えて行き・・・そしてただの木片に変わった。

「なに!」

今度は後ろから感じる気配を突く。だがまたそれは木片へ。

横、上、また横から、さらに上からまた横へ。

どんどんと増えていく木片と疲労。

「終いだ!音殺クナイ!」

十個と言わず、二十個と言わず、クナイが三六九さんに殺到する。

その絶体絶命をにやりと笑って待ってました!

「そこにいられたんでするか?」

その一言を残し、全身にクナイを刺される三六九さん。

「終わった・・・いや！まだだ！」

上を見上げた黒屋が見たのは、月をバックに舞う三六九さん。

「無量我一流　第壱式　　二の太刀！」

それは、とてもきれいで、残酷で、

「【砕】」

最後に覚えている光景だった。

チュンチュン・・・

「おはよう！やよねぇ・・・ってクロちゃん！」

「しーーっ！今は眠ってるだけだから大丈夫。そこのソファーでぐったりしてるんだもの。私も驚いたわ～」

ゴロリと寝返りを打つ黒夜に、ただただ目を見開く小奈美だったとさ。

余談ですが・・・

「な、なんで三六九様がワタシの布団で寝てんだ?:?:?:?:?:?:で、

でもこれはこれで・・・」

「～ＺＺＺ～～ＺＺＺ」

「あぁぁぁぁぁぁぁ！眠れない！！！！！！！！！！！！！」

寝ぼけてそのまま寝ようとしたら、布団はクナイだらけの三六九さんは、そのまま隣の麗さんの布団にもぐりこんだのだった・・・。

そのせいで寝不足になった麗さんには・・・殺されるのかなぁ？

続く！

第七撃：忍者と三六九！『上』（後書き）

この黒夜というキャラクターは、私の中では三六九さんよりも先に出来上がったキャラクターで、とても気に入っているものです。クールな二枚目なのに、どこか熱血で無鉄砲。そんな彼をこんごともよろしくお願いします！

第八撃：忍者と三六九！『下』（前書き）

ゲゲゲの下です。

・・・すんません

第八撃：忍者と三六九！『下』

今日も朝からこの家は、穏やかなんか、ありえない。

鳴りやまない喧噪の中、一人の男が目を覚ました。

「お・・・・じょうさま？」

「あ！目ぇさめた？おはようクロちゃん」

・・・・ガバァ！

「も、もうしわけございませぬ！な、なぜお嬢様のお、、、お膝の・・・その・・・枕など」

「あははっ！いいよぉ別に！そう言えばいつ以来だったかなぁ？」

「そ、そんな・・・私目には過ぎたものです・・・」

そう言いながら飛び起きた黒夜は、申し訳なさそうに頭を下げた。

「むーっ！まぁいっか。それよりもだいぶ帰りが早かったね！」

「いえ、里の者たちの現状の確認と墓参りだけでしたので・・・」

そこにタイミングよく弥生さん登場！

「もぉ～そういうこと言ってる場合？どうしてあんなに傷だらけでソファーで寝てたの～？」

「だめだよお姉ちゃん。クロちゃんは怪我するのがしょっちゅうなんだし」

めっと言う顔で黒夜に問う弥生に弁解する小奈美。

「いえ、この屋敷に侵入している者を見つけ、排除しようとしたのですが・・・」

「えぇぇ！クロちゃんが負けたの！？」

「はぁ、申し訳ございません・・・」

ガバッと再び頭を下げようとする黒夜をやんわりと止め、その眼を見ながらたしなめる弥生。

「いいわ、別に。たとえ全ての忍術を極めてるクロくんでも、負けちゃう時は負けちゃうわ。大事なのはみんなが生きていること。そうでしょう？だからそんなに気にしないで」

「いえ・・・忍びの道を歩みだして１５年。負けを期したことは多々ありましたが、今回ほどに力の差に圧倒されたことはありませんでした」

忍の人生は、いや武道の世界で生きる者の道は常に敗北の連続である。敵に負け、己に負け、年に負け、時代に負け・・・。

だがそれでも彼らは抗ってきた。抗えば手の届く場所だった。

「今回の敵は、強すぎます。ですが次は、次こそは全てをかけて・・・」

「全てをかけて？死ぬなんて言わないよね？ねぇ、言わないよねクロちゃん！」

「それでもお嬢様を守るために、いえ、私自身の誇りを取り戻すためにも」

≪ガラガラガラ≫

「クロくん、あなたは間違ってるわ！」

（ったく！なんでワタシのベッドなんかに）

（寝心地よさそうなおおきなべっとでございましたから）

「あなたがたとえその強い相手に負けたとしても」

（でもだからって・・・心の準備が）

（？何の準備でございまするか？）

「ちょっと～今いいことをうとしてるんだから邪魔しな～いの！」

「ん？おおクロスケじゃねーか！んだ？ボロボロじゃねーか！」

「！」

「おろろ？そなたは先刻の忍び？」

「クッ！ここまで馴染んでおったとは。だが今回はああはいかんぞ！秘儀！【影・百花繚るぉ】・・・！！」

ガバッと三六九さんに八双飛びをかまそうとする黒夜にクロスカウンター。

誰もが予想だにしなかったその拳は、ザ★家主から放たれていた。

「いきなりなにしてんだクロスケ！こいつは私の・・・その・・・知り合いだ！」

その・・・の後が気になる所ではありますが、お話は進ませます。

「えぇッ？まさかクロちゃんの負けた相手ってミロ君？」

顔面に拳を食らった黒夜をさらに追い詰める一言を放つ小奈美。

「くっ！負けたことに加えて、勘違いで主の既知に刃を向けるとは・・・忍云々関係なく切腹もの！さらばっ！」

いきなり上半身裸になり、どこから出したか忍び刀を腹に刺そうとする黒夜。

「ちょっとちょっとちょっと！クロちゃんなにやってるの！馬鹿っ！」

「く、黒君なにやってるの！」

「極端なんだよクロスケが！」

「介錯人は某が！」

慌てて止めに入る三人。若干一人助長。

「余計にややこしくすんなっ！」

お久しぶりです。●●○●！

「グファ！」

「な！あれほどの力を持つ者を一撃で！くっ・・・やはり切腹・・・」

「だぁーからー！そんなことしたってなんにもなんないでしょ！」

「いえお嬢様！忍びとして、一介の武人として、これでは誇りも自信も・・・」

「別にいいじゃん！誇りなんて！私はクロちゃんを一番信じてる。クロちゃんは強くて優しくて絶対に約束を破んない最高の人間だよ！だからそんなに簡単に死のうとしないで！」

「お、お嬢様・・・」

「小奈美ちゃんっ立派になって・・・」

涙をいっぱい目にためて、ぎゅっと手を握りしめる小奈美に黒夜は心を打たれる・・・

その後ろで妹の成長を見守るおねいちゃん。

「～なんのお昼のメロドラマなんだ？この家は」

このあとまた様々なすったもんだがあったんですが、書き出したらきりがないのでまた今度。

「ついに三六くんと影忍が接触した・・・」

再び小高い丘の上から。

「・・・もうすぐ動く」

一つの影が、姿を消した。

もうすぐ出会うその日まで、残りの時間はあとわずか。

はたして影はなんなのか。味方でないのはまず確か。

第八撃：忍者と三六九！『下』（後書き）

まだまだ住人編は続きます＝新キャラ登場です。
あと何人増えるのかな？
作者もすこし心配です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8690c/

ここらで三六九！

2010年10月28日04時44分発行